

絶滅危惧父系に光を求めて

続・日本で絶滅したノーズンテースト系が中国で生きていた！

文写真／高木毅 情報提供／のり塩、China Horse Racing

ノーズンテースト系の生き残りを確認するため
いざ新疆ウイグル自治区へ

昨年の夏、サラブレの同年8月号に掲載されていた血統企画「絶滅危惧父系に光を求めて」の「日本で絶滅したノーズンテースト系が、中国で生きていた」を読み、とても驚いた。私が子供の頃に楽しんだスーパーファミコン版『ダービースタリオンⅢ』で、種付け料1位の種牡馬はノーズンテーストだった。それを筆頭にアンバーシャダイ

イやダイナガリバーなどノーズンテースト系の直系種牡馬は多数存在していたが、現在、日本国内にノーズンテースト系の競走馬が1頭もいなくなってしまうというのは……。驚愕の事実だった。

さらに驚いたのは、そんなノーズンテーストの直系で、メジロアルダンの仔にあたるウーディー（英字表記Mei Di、現地表記では无敌）という馬が、中国のどこかで生きているという話しかもサラブレッドの現役種牡馬として、現地で多くの産駒を送り出してい

るといふ。

「何とかして、中国から日本に産駒を1頭でも連れてきて、ノーズンテースト系の血を繋ぐことはできないか？」

そんな気持ちが私の中に生まれた。幸いにして私は香港在住で、その前には中国にも住んでいたことがあり、中国語は片言だが話せる。ならば中国国内にいるメジロアルダンの仔、ウーディーに会いに行くことができるのではないだろうか。ただ、その記事を読んだ時点でウーディーの正確な所在地は不明だった。

兎にも角にもその存在を自分の目で確認したいと考えた私は、まずウーディーの存在を日本で最初に見つけ、記事内にも登場しておられた「のり塩さん」とツイッターで連絡を取り、その想いを伝えた。すると、のり塩さんからウーディーの登録情報と、その供用地である「牧駿農牧業發展有限責任公司（駿农牧業發展有限公司）」の所在地が書かれているWEBサイトを教えていただくことができた。その地を確認

したところ、そこは確かに中国ではあるが、北京からも遠く離れたカザフスタン国境にある新疆ウイグル自治区だった。

不安と希望が交錯する中、どうにかしてウーディーの牧場関係者との接点を作ろうと、英語で中国競馬をツイッターで配信している「China Horse Racing @ CHN_Horseracing」(以下CHR)に連絡を入れてみた。この時私はふたつの希望を伝えた。ひとつ目は、ウーディーの存在を自分の目で確認したいこと。ふたつ目は、ウーディー産駒の牡馬を見たいこと。対応していただいたのはとても親切な方で、中国国内の競馬事情に広く精通しており、その方を通じてウーディーを所有している方と連絡を取ることができた。

その結果、やはりウーディーは中国の新疆ウイグル自治区にいて、その「ナラティ（那拉提）」という場所で、今年18歳（02年産）となった現在も種牡馬を続けているとの回答だった。ナラティという中国在住者でも聞い



Wu Di（ウーディー）
※現地名「无敌」は日本の漢字表記では「無敵」
社（種牡馬）黒鹿毛 2002 中国産 27勝（出走回数不明）
中国・北京龍頭牧場生産 牧駿農牧業發展有限責任公司供用中

メジロアルダン 黒鹿毛 1985 日	アスワン 鹿毛 1979 日 メジロヒリュウ 鹿毛 1972 日	*ノーズンテースト *リリーオブザナイル *ネヴァービート *アマゾンウォリアー
ヤマニンディライト 鹿毛 1991 日	*スリルショー 鹿毛 1983 米 *リリズム 鹿毛 1979 米	Northern Baby Splendid Girl Lyphard Pass a Glance

たことがないような地名を探し、さらに調べたところ、新疆ウイグル自治区の最大都市ウルムチから飛行機が飛んでいることがわかった。そこで私は香港からウルムチに行くため、北京を経由し、香港→北京→ウルムチ→ナラティというルートで実際に現地へ赴くことに決めた。しかしウルムチからナラティの便は限られており、香港から北京に着いたところでまずは1泊。そしてウルムチでさらに1泊して、そこからナラティに辿り着くプランとした。

「本日これから北京經由で、ウーディーの待つウイグル自治区・那拉提へ行つて参ります。のり塩様とCHRの方に大変お世話になりました」とツイッターでメッセージを残し、そして私は北京へ旅立った。

北京で見た競馬関連施設 競馬場と日本人が開設した 北京龍頭牧場の今

北京では1泊するため、比較的時間の余裕があることから、ついでに寄れそうな競馬関連の施設を探してみた。すると北京首都国際空港の近くに、05年11月まで競馬が開催されていた「北京通順競馬場」の跡地があるとの情報を得ることができた。北京到着後、早速空港からタクシーで直接現場へ。しかしタクシードライバーに聞いても「そんなところに競馬場はなかった。そもそも、北京に競馬場はなかった」とのこと。どうやら現地でもあまり知られていなかった施設らしい。中国ではグーグル検索が規制により使えないものの、グーグルの地図上には更新されていない古い情報は残されているた



北京通順競馬場の正門。コースは1周2280mあったという。05年11月まで草競馬が開催されていたが、閉鎖後は整備されていない様子。

め、それを頼りになんとか向かってもらった。

空港からタクシーで30分ほど走ると、それらしき建物に到着。壁には確かに「北京通順競馬場」と書かれていた形跡がある。正門には門番らしき上半身裸の男がいて、「中は工事中のため、立ち入り禁止」とのことだった。しかし門の外から、中の様子を撮らせてもらうことはできた。

コースは1周2280m。2005mの芝コースと、1850mのダートコースがあったとのこと。近くには放牧地だったような跡地もあり、閉鎖以来、整備されていない様子だった。

この競馬場で開催が行われていた頃といえば、最初に読んだサラブレ08年8月号の記事にあった、日本の北海牧場が中国でのサラブレッド事業開拓を模索していた頃だ。記事には2000年に、その北海牧場が設立した中国の「北京龍頭牧場」にメジロアルダンとスリルショーが日本から寄贈されたことが記されていた。

では現在、その「北京龍頭牧場」はどうなっているのか？ 競馬場の次は、その場所に向かってみた。競馬場



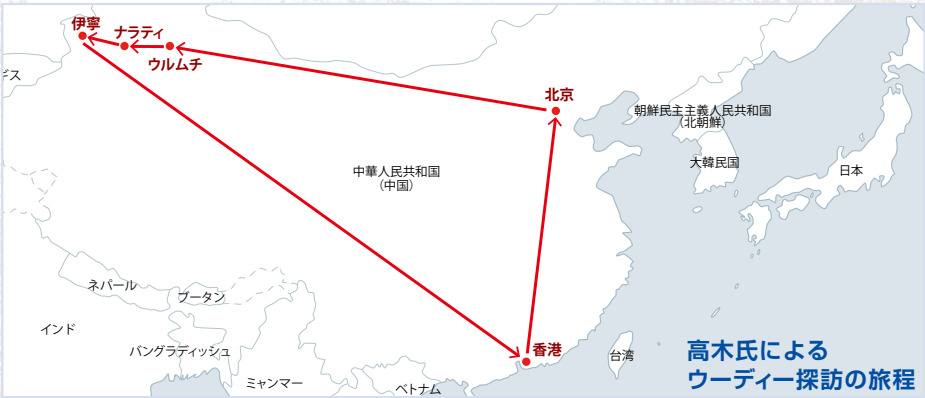
著者紹介
(右はウーディー)

高木毅（たかぎ・つよし）。岐阜県育ち、現在香港在住。馬主（日本の地方競馬）。幼いころから笠松競馬場と中京競馬場を主戦場とし、父親の競馬新聞から馬の写真が載った馬柱を切り取って遊ぶ。地元岐阜県・笠松のヒーローであるオグリキャップが大好き。『サラブレ』2018年8月号の「絶滅危惧父系に光を求めて」に関連し、オグリキャップの子孫育成についても尽力中。現在、父内国産の血統を支援する「競走馬のクラウドファンディング」を準備中。詳細はブログ「サラブレッドと世界を駆ける」(https://garytak.com/)にて。ご協力を頂きます方、お気軽にご連絡ください。

※3世種牡馬以降にまで延びた父系のみを抽出。



新疆ウイグル自治区、ナラティ(那拉提)。下の写真は中でもウーディーがいる自然保護観察区。土地は広大で、カザフスタンとの国境に近い。



ウーディー産駒を日本に輸入して走らせるための行動

香港到着後、私にとっての重要なテーマは「中国のウーディー産駒を日本へどのようにして連れてくるか」だった。農林水産省及びジャパン・スタッドブック・インターナショナルなど関係先に問い合わせた。結果、海外から馬を輸入するに当たっては、輸出国と日本との間で「家畜衛生条件」と呼ばれる輸入条件が、あらかじめ取り決められている必要があるとのこと。中国と日本は、過去に馬の輸入について「家畜衛生条件」を取り決めたことはあるものの、衛生状況に合わせて内容の改正が必要となっており、現在は2カ国間で協議中だという。つまり事実上凍結されている状態であるため、現在中国本土からは日本へ直接馬を輸入することはできないことがわかった。

日本から中国へは比較的内容に輸出ができ、毎年多くの競走馬が日本から中国に渡っているが、その逆は不可。他国を経由しないといけないというの

うやくひと安心となった。ナラティにはタクシーやバスといった公共交通機関がなく、とにかく土地が広い。移動には車が必須だが、レンタカーもない。そもそも私は免許を持っていない。ナラティを日帰りで独り訪れるプランが、とてつもなくハードルが高かったことに牧場長の車に乗りながら気づいた。

ウーディーがいる牧場「牧駿農牧業 髪展有限責任公司」は、空港から1時間ほど車で走った新疆ウイグル自然保護観察区の中にあつた。牧場関係者は無料で、部外者は許可証を購入して入るそう。許可証を入手した私を乗せ、緑いっぱいの敷地を走り抜けて、ついに牧場へ。



18歳のウーディーだが、馬っ気を出しているこの写真からもわかるとおり闘志は満々。今年は6月まで種付けをしていたという。

「日本からここに来た人は初めてだよ」。到着早々、昨日と同じことを言われ歓迎を受けた後、厩舎からウーディーが姿を現した。500キロを超え、雄大な馬体、荒い気性。見るからに闘志は満々だった。種牡馬になってからも、競走馬時代からの気性の荒さは相変わらずとのこと。種付けは6月まで行われており、この時(8月4日)はが現状だそう。であれば中国の馬を競馬の盛んな香港に連れて行って、香港から輸入することは可能なのではないか。この点を改めて問い合わせたところ、現在、香港と日本の間で締結されている馬の家畜衛生条件は「国際交流競走に参加するために輸入される馬」に適用されるもののみで、その他の用途に供する馬については現状、香港からも輸入はできないとのこと。つまり、国際交流競走に出走するためだけとのこと。諦めきれず、さらに「国際交流競走ではなく、一般の地方競馬の競走出走させるため、日本に輸入することができ国はどこかございますか」と尋ねたところ、農林水産省のWEBサイト内にあるリストを教えてもらうことができた。本題からは少し逸れるため、このリストに興味のある方はグーグルで「馬の家畜衛生条件」と農林水産省のページを検索してみてください。

海外から日本への馬の輸入に関する「家畜衛生条件」の取り決めがある国の中で、日本と中国から一番近い国は、東南アジアのシンガポールだ。ご存知のとおりシンガポールでは競馬が行われているため、条件を満たした馬をシンガポールから輸入することは可能であり、実際に過去シンガポールから日本に競走用馬が輸入された実績もあるとのこと。

しかし、中国からシンガポールへ馬を輸入する条件については、シンガポール当局に尋ねる必要があるという。そして、シンガポールを単なる経由地として日本に輸入することはできず、一旦シンガポールに入れないといけない



北京龍頭牧場。かつて日本の北海牧場により設立されたが、現在は中国資本に移管されて運営されているという。ウーディーはここで誕生した。



からタクシーでさらに1時間ほど走り、白樺の並木を通り抜けて、辿り着いたその先に、「北京龍頭牧場」はあった。「日本からここに来た人は初めてだよ」と見学を快く受けてくれたのは、中国人のスタッフだった。日本の北海牧場が撤退し経営が中国資本に移ったあとも施設はそのまま運営されているという。場内には「メジロアルダンのお墓」が残されており、それを見せ

メジロアルダンが眠っているという。他にもスリルショーやチャズブライトリーなど、日本から渡ってきた多くのサラブレッドの足跡も紹介していた。日本からの輸出馬は、中国にきた際に馬名が中国名となる。この中国語名が、必ずしも元の馬名の直訳ではないため、元の馬名が知られておらず、日本語の馬名を特定するには苦労を要した。そんな中でわかった事実として、ウーディーはこの北京龍頭牧場で生まれたという。北京龍頭牧場は「日本からの関係者はいつでも歓迎する」とのことだった。

ついにウーディーと対面！自身および産駒の確認と購買に向けた最初の一步

翌日、私は北京からウルムチへ旅立ち、さらにウルムチからついにナラティへと到着した。空港の周りには建物がなく、緑が広がっている。空港に降りると外国人は登記をさせられたが、その便には私以外の外国人は乗っていないかった。

香港の職員には「迎えの方が現れて、身分を示してもらえなければ、空港からは出られない」と言われたが、迎えに来てもらっているはずの牧場関係者がどこにもいない。とても不安になりながら、CHRの担当者に教えてもらっていた携帯電話の番号に電話をしてみると、「到着したか？これから牧場を出るから、ちょっと空港で待っていてくれ」とのことだった。どうやら実際に日本人がわざわざ来るなんて、先方も半信半疑だったようだ。その後、牧場長が車で迎えに来てくださり、よ



北京龍頭牧場内にある、上はメジロアルダンの墓。下はチャズブライトリーの姿と血統を示す看板の名残で、スリルショーのものも確認できた。

うやくひと安心となった。ナラティにはタクシーやバスといった公共交通機関がなく、とにかく土地が広い。移動には車が必須だが、レンタカーもない。そもそも私は免許を持っていない。ナラティを日帰りで独り訪れるプランが、とてつもなくハードルが高かったことに牧場長の車に乗りながら気づいた。

ウーディーがいる牧場「牧駿農牧業 髪展有限責任公司」は、空港から1時間ほど車で走った新疆ウイグル自然保護観察区の中にあつた。牧場関係者は無料で、部外者は許可証を購入して入るそう。許可証を入手した私を乗せ、緑いっぱいの敷地を走り抜けて、ついに牧場へ。

「日本からここに来た人は初めてだよ」。到着早々、昨日と同じことを言われ歓迎を受けた後、厩舎からウーディーが姿を現した。500キロを超え、雄大な馬体、荒い気性。見るからに闘志は満々だった。種牡馬になってからも、競走馬時代からの気性の荒さは相変わらずとのこと。種付けは6月まで行われており、この時(8月4日)は

オフシーズンだったが、ウーディーはまだいつでも種付けができるような元気な状態だった。

続いて、馬房の中にいたウーディーの産駒を見せていただいた。すべてサラブレッドで、今年の産駒(19年産)には牝馬が多く、牡馬は少ないという。そして現在、牧場で売れ残っている牡馬は1頭だけとのこと。購買を交渉したところ、後日100万人民币(約1500万円)という価格提示を受けた。後日調べてみると、これは中国の競走馬としては破格の値段(高額)で、CHRの方も、価格を交渉するか、来年まで待った方が良いとアドバイスをいただいた。

「週末は、この牧場の近隣に競馬場があり、草競馬が開催されているので、次は競馬が開かれる時に来て楽しんでほしい」と誘っていただいた。ナラティからウルムチへは便がないため、帰りは、よりカザフスタンの国境に近い伊寧空港から、夕方に香港へと出発する便を予約していた。関係者とは連絡先を交換し、感謝して、そして再会を約束して別れた。

いとのこと。

ここまで大きな手順となると、私個人の力ではどうにもならない事と理解した。仔馬1頭を中国の新疆ウイグル自治区から、諸々の手続きを踏んでシンガポールへ輸入し、そしてシンガポールから日本へ輸入するなんて、気が遠くなる話だ。

しかし、諦めたくない思いはある。私は近い将来、クラウドファンディングを設立して、中国からシンガポール経由でノーザンテースト系の生き残り「メジロアルダンの孫をなんとか日本に輸入したい」と考えている。これは、ウーディーの産駒が生きている間に実現したい。ウーディーは、今年18歳。残された時間は長くない。

ノーザンテースト系以外にも、守らねばならない血統は日本国内にも多い。私は生涯に渡り、日本の父内国産血統を大切に守っていく信念を持って、馬に関わる人生を生きたいと思っている。